

「シメオンとアンナ」

ルカの福音書 2:21~39

はじめに

幼子としてお生まれになったイエシュア、両親以外でそれを最初に見たのはベツレヘムの羊飼いたちであったことは有名ですが、これは意外と知られていないことなのですが、その羊飼いたちの次にイエシュアを見たのは、東方の博士たちではありません。実は今日の箇所が登場するシメオンとアンナです。しかしこの教会でもクリスマスにこの二人のことが語られることはほとんどなく、博士たちの方が取り上げられます。遠い東の国から不思議な星に導かれてはるばるやって来るという、見た目にはこちらの方がよりドラマ性が高くおもしろく見えるからでしょうか。今日はそんな一見目立たない、隠れた、知られざるクリスマス物語、シメオンとアンナが幼子イエシュアに出会う場面を見てまいります。もちろんヘブル語の最初の言及による、神のご計画の視点でこれを読み解いてまいります。御霊の助けがありますように。

1. きよめ

ルカの福音書【新改訳 2017】

2:21 八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子の名はイエスとつけられた。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。

2:22 そして、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子をエルサレムに連れて行った。

2:23 それは、主の律法に「最初に胎を開く男子はみな、主のために聖別された者と呼ばれる」と書いてあるとおり、幼子を主に献げるためであった。

2:24 また、主の律法に「山鳩一つがい、あるいは家鳩のひな二羽」と言われていることにしたがって、いけにえを献げるためであった。

これらの記述は「モーセの律法」に定められた、男子の出産に関する規定に従ったものです。レビ記にこのように記されています。

レビ記【新改訳 2017】

12:1 【主】はモーセにこう告げられた。

12:2 「イスラエルの子らに告げよ。女が身重になり、男の子を産んだとき、その女は七日の間汚れ、月のさわりの不浄の期間と同じように汚れる。

12:3 八日目には、その子の包皮の肉に割礼を施す。

12:4 彼女は血のきよめのために、さらに三十三日間ももる。そのきよめの期間が満ちるまでは、いかなる聖なるものにも触れてはならない。また聖所に入ってはならない。

12:6 彼女のきよめの期間が満ちたら…全焼のささげ物として一歳の子羊一匹と、罪のきよめのささげ物として家鳩のひなか山鳩を一羽、会見の天幕の入り口にいる祭司のところに持って行く。

12:8 しかし、もし彼女に羊を買う余裕がなければ、二羽の山鳩か、二羽の家鳩のひなを取り、一羽は全焼のささげ物、もう一羽は罪のきよめのささげ物とする。祭司は彼女のために宥めを行い、彼女はきよくなる。」

このように、幼子イエシュアとその両親は、上記の律法に従ってこれらのことを行ったのです。そしてその目的は「聖別」と「きよめ」のためであることがわかります。この「聖別」のための「割礼」については以前ルカ 1:59 の解釈の時点で詳しくお伝えしましたが、ざっくり申し上げますと「アブラハム契約」と呼ばれる、神がアブラハムに約束された、彼とその子孫に豊かな土地をお与えになり、これを大いに祝福し、またそれにつながる異邦人も同様に祝福されるという世界の実現を指し示したものがこの「割礼」による「聖別」です。幼子イエシュアはまさにその神の約束、ご計画を成就、完成される神の御子、イスラエルをはじめとする全人類の長子、初子なる御方です。律法に定められた「最初に胎を開く男子」の「割礼」はすべてこのイエシュアを指し示すものなのです。この神の長子イエシュアによるアブラハム契約の成就、これこそが私たちが覚えるべき律法であり、忘れることなく捨てることなく、誰にも奪われることのないように守らなければならない教えです。

では次に「きよめ」について述べたいと思います。ヘブル語で「きよめる」ことをターヘール(טהר)といい、その最初の言及は創世記 35:2 です。

創世記【新改訳 2017】

35:1 神はヤコブに仰せられた。「立って、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウから逃れたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい。」

35:2 それで、ヤコブは自分の家族と、自分と一緒にいるすべての者に言った。「あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、身をきよめ、衣を着替えなさい。

35:3 私たちは立って、ベテルに上って行こう。私はそこに、苦難の日に私に答え、私が歩んだ道でともにいてくださった神に、祭壇を築こう。」

35:4 彼らは、手にしていたすべての異国の神々と、耳につけていた耳輪をヤコブに渡した。ヤコブはそれらを、シエケムの近くにある榎の木の下に埋めた。

神はアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルに「神の家」という意味の地「ベテル」に住むように、そしてそこに祭壇を築くように命じられました。そこでヤコブは「自分の家族と、自分と一緒にいるすべての者」に対し、ターヘール「身をきよめ」なさいと言いました。このように「きよめ」ターヘールとは本来、異国の神々を捨て、イスラエルの神の家、神の国に住むこと、そしてこのイスラエルの神にのみ仕えることを意味する言葉なのです。ちなみにここで彼らは「耳につけていた耳輪をヤコブに渡した」ともありますが、当時耳輪は奴隷のしるしでした。つまりイスラエルの神の家、神の国に住む者はもはや奴隷の民ではない、罪と死、滅びから永遠に解放された、救われた民であるということがここには表されているのです。

2. 鳩とひな

そしてその「きよめ」のために、律法に従い「山鳩一つがい、あるいは家鳩のひな二羽」が献げられています。これもまた同様に「アブラハム契約」を指し示すものです。

創世記【新改訳 2017】

15:7 主は彼に言われた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した【主】である。」

15:8 アブラムは言った。「【神】、主よ。私がそれを所有することが、何によって分かるのでしょうか。」

15:9 すると主は彼に言われた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩のひなを持って来なさい。」

15:10 彼はそれらすべてを持って来て、真っ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。ただし、鳥は切り裂かなかった。

15:17 日が沈んで暗くなったとき、見よ、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、切り裂かれた物の間を通り過ぎた。

15:18 その日、【主】はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。」

神はアブラハムとの「契約」のしるしとして「三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩のひな」を用意させます。ここで切り裂かれる三つの三歳の家畜はエルサレムの神殿を表しています。すでに第一と第二の神殿は崩壊しました。残るはやがて建てられる第三の神殿です。つまりこのしるしはイスラエルの神殿とその民を表したものとなっており、ここで「切り裂かなかった」「山鳩と、鳩のひな」とは第三神殿が崩壊する時に生かされているイスラエルの残りの者を表しているのです。この御言葉は一義的にはモーセによる出エジプトの奇蹟を指し示していますが、実はそれも「型」に過ぎず、究極的には世の終わりの大患難を通らされ、その後には神の国の祝福に至るイスラエルの民の残りの者を表しているのです。

しかしここで注目していただきたいことがあります。アブラハムに示されたしるしでは「山鳩と、鳩のひな」はそれぞれ一羽ずつだったのです。しかしイエシュアの両親がエルサレムで献げたのは「山鳩一つがい、あるいは家鳩のひな二羽」でした。そうです、一組多いのです。結論からしてこれは、私たち教会を表しています。イスラエルの残りの者たちとは異なり、世の終わりの大患難を通ることなく神の国の祝福に至る民、すなわち私たち教会の存在がここには表されているのです。次の記述にそれを表す「型」となる存在が描かれています。

3. シメオン

ルカの福音書【新改訳 2017】

2:25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた。また、聖霊が彼の上におられた。

2:26 そして、主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない、聖霊によって告げられていた。

2:27 シメオンが御霊に導かれて宮に入ると、律法の慣習を守るために、両親が幼子イエスを連れて入って来た。

2:28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。
2:29 「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。
2:30 私の目があなたの御救いを見たからです。
2:31 あなたが万民の前に備えられた救いを。
2:32 異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。」
2:33 父と母は、幼子について語られる様々なことに驚いた。
2:34 シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人
が倒れたり立ち上がったたりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められていま
す。
2:35 あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くこととなります。それは多くの人の心のうちの思いが、あ
らわになるためです。」

ここに記されたシメオン、彼の存在は「イスラエルが慰められるのを待ち望」む、「聖霊」「御霊に導か
れて」歩む私たち教会の象徴「型」です。そして「主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない」、
すなわち生きてままイエシュアがこの地上から「安らかに去らせて」くださるといふ、「異邦人を照らす
啓示の光」であるイエシュアによってそのみもとに引き上げられる、携拳される教会の「型」です。この
ように捉えるならば、次の女預言者アンナがユダヤ人も呼ばれるイスラエルの民の残りの者を表してい
ることは言うまでもありませんが、確認してみましょう。

3. アンナ

ルカの福音書【新改訳 2017】
2:36 また、アシエル族のペヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。この人は非常に年をとって
いた。処女の時代の後、七年間夫とともに暮らしたが、
2:37 やもめとなり、八十四歳になっていた。彼女は宮を離れず、断食と祈りをもって、夜も昼も神に
仕えていた。
2:38 ちょうどそのとき彼女も近寄って来て、神に感謝をささげ、エルサレムの贖いを待ち望んでいた
すべての人に、この幼子のことを語った。
2:39 両親は、主の律法にしたがってすべてのことを成し遂げたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレ
に帰って行った。

先ほどのシメオンとは違い、このアンナは「アシエル族のペヌエルの娘」であると、その素性が明確に
記され、彼女がれっきとした、生粋のイスラエル人であることが強調されています。また彼女の父ペヌエ
ルという名は、ヤコブが神から「あなたの名はもうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ」と言われたそ
の場所の地名で（創世記 32:31）で「神と顔と顔を合わせる」という意味を持った名です。そして彼女は
アシエル族であったとありますが、モーセがその死の前にイスラエルの十二部族をそれぞれ祝福した預言
にこうあります。

申命記【新改訳 2017】

33:1 次は神の人モーセが、その死を前にしてイスラエルの子らを祝福した、祝福のことばである…。

33:24 アシエルについては、こう言った。「アシエルは子らの中で最も祝福されている。その兄弟たちに愛されて、その足を油の中に浸すようになれ。

33:25 あなたのかんぬきは鉄と青銅。あなたの力が、生きるかぎり続くように。」

33:26 「エシュレンよ、神に並ぶ者はほかにない。神はあなたを助けるため天に乗り、威光のうちに雲に乗られる。

33:27 いにしえよりの神は、住まう家。下には永遠の腕がある。神はあなたの前から敵を追い払い、『根絶やしにせよ』と命じられた。

33:28 こうしてイスラエルは安らかに住まい、ヤコブの泉だけが穀物と新しいぶどう酒の地を満たす。天も露を滴らす。

33:29 **幸いなイスラエルよ**、だれがあなたのような、【主】に救われた民であろうか。主はあなたを助ける盾、あなたの勝利の剣。敵はあなたに屈し、あなたは彼らの背を踏みつける。」

アシエルとは「**幸いな**」もの、という意味の言葉で、モーセはこれを用い「**幸いなイスラエルよ**」と呼んだのです。つまりアシエルとはイスラエルの十二部族の一つを指すのではなく、神の祝福に与る、回復されたイスラエルの民全体を指す名なのです。

また神の民、神と契約を結んだ神の妻のような存在としてのイスラエルが、神に捨てられた「**やもめ**」のようになることがこのアンナには表されています。彼女は「**八十四歳**」であったともありますが、「**七年間**」は夫とともにいたともあり、処女の時代も含めると、彼女に夫がいない期間は「**七十七**」年です。この数は本来「罪の報い、復讐、報復」を指し示す数で、非常に重い罰を受けることを意味する数です（創世記 4:24）。まさに神に捨てられたような大きな苦しみ、大患難の中を通らされるイスラエルの姿が、このアンナの年齢にさえも表されているのです。

さらに言えば、旧約聖書では「ハンナ」と訳される、同じ名を持ったその女性は、夫はいましたが不妊の女で、しかも自分の他にもう一人いた妻ペニンナという女性から敵視され、いじめられ「私は心に悩みのある女です（Iサムエル 1:15）」と告白して、主の御前に激しく泣いて祈りました。その心の痛み、主に願い求める切実な姿は「**エルサレムの贖い**」を切に待ち望み「**宮を離れず、断食と祈りをもって、夜も昼も神に仕えていた**」このアシエル族ペヌエルの娘アンナと結びつきます。しかしやがて

Iサムエル記【新改訳 2017】

1:19 …【主】は彼女を心に留められた。

1:20 年が改まって、ハンナは身ごもって男の子を産んだ。

ともあり、やがて主はハンナを顧みられます。同様に女預言者アンナはエルサレムの宮に「**男の子**」神の御子イエシュアを見るのです。これら二つの出来事はもちろん、終わりの時代の大患難を通らされたイスラエルの民が再臨のメシア、神の御子イエシュアを見、この御方によって「**エルサレムの贖い**」「**イスラエルが慰められる**」のを見ることを指し示しています。

4. 神の足音

このように、エルサレムの宮に幼子イエシュアを見たシメオンとアンナ、これら二人の存在は終わりの時代における携挙される教会と、大患難を通らされるイスラエルの残りの者を表す「型」なのです。今日の箇所は多くの場合、マリアとヨセフが律法を忠実に守ったこと、シメオンが正しい、敬虔な人であったこと、アンナがいつも宮で断食をもって祈っていたこと、つまり人の行い、人の信仰姿勢ばかりが注目され、みなそれに倣うようにがんばりましょう、求めましょう、というメッセージとなります。しかし私たちが本当に注目しなければならないのは人ではなく神であり、その御業です。神がどのような御心、み旨、ご計画をお持ちかということです。そしてそれを知り、覚え、その到来を待ち望めということなのです。そのために必要なこと、私たちがしなければならないことは一つです。それは神の足音を「聞く」ことです。今日箇所のシメオンの中に教会の「型」があると述べましたが、シメオン(שמעון)とは「神の歩まれる音を聞く」(創世記 3:8) という意味のシャーマ(שמע)を由来とする名です。つまり私たち教会とは神の歩まれる音、つまり神がどこに向かって行かれるのか、どのようにして来られるのかという音、声、すなわち御言葉を聞く者であるということが示されているのです。ちなみにアンナ(אננה)という名は「天幕を張る」という意味のハーナー(הננה)と綴りが全く同じで、天幕生活、すなわち定住を許されず寄留者、流浪の民として生きたイスラエルの民、ユダヤ人たちの歴史がその名のうちに見事に表されています。

私たち教会は神の足音を聞く者、神の御言葉、聖書に示された、神が歩んで行かれる、神が来られる、神の御子イエシュアが来られる、という事実を耳を傾け、聞く存在であることが今日の箇所のシメオンには示されていました。しかしイエシュアの来られるその足音は、決して大きくはありません。いや正確にはそれを遮る雑音が多いのです。テレビやインターネット、新聞や雑誌などのメディアから発せられる情報、知識を伝える声、周りの人々の声、そして自分自身の思い、考えの中から発せられる声、これらの雑音、騒音が私たち教会が聞くべきイエシュアの足音を遮ります。そして私たちの心を恐れさせ、混乱させ、虚しくさせます。これに対処するには、今日のシメオンがそうであったように聖霊の導き、助けが必要です。どうか主が御霊によってイエシュアの来られる足音、御言葉を聞く耳を私たち一人ひとりに与え、強めてくださいますように。